



博雅文库  
BOYA WENKU

# 现代日语助词性

## 机能辞研究

二〇〇八年度上海市研究生优秀成果

毛文伟／著



华东理工大学出版社



# 现代日语助词性

## 机能辞研究

二〇〇八年度上海市研究生优秀成果

毛文伟 / 著



华东理工大学出版社

**图书在版编目(CIP)数据**

现代日语助词性机能辞研究/毛文伟著. —上海: 华东理工大学出版社,  
2009.5

ISBN 978-7-5628-2528-9

I. 现... II. 毛... III. 日语-助词-研究 IV. H364.2

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2009)第 039607 号

**现代日语助词性机能辞研究**

毛文伟 著

责任编辑 / 常海霞

责任校对 / 金慧娟

封面设计 / 戚亮轩

出版发行 / 华东理工大学出版社

地 址: 上海市梅陇路 130 号, 200237

电 话: (021)64250306(营销部)

(021)64252717(编辑室)

传 真: (021)64252707

网 址: [www.hdlgpress.com.cn](http://www.hdlgpress.com.cn)

印 刷 / 常熟华顺印刷有限公司

开 本 / 890mm×1240mm 1/32

印 张 / 7.375

字 数 / 210 千字

版 次 / 2009 年 5 月第 1 版

印 次 / 2009 年 5 月第 1 次

印 数 / 1—1000 册

书 号 / ISBN 978-7-5628-2528-9/H·819

定 价 / 48.00 元

(本书如有印装质量问题,请到出版社营销部调换。)

## 前 言

在各种语言中,都会出现词汇的新旧交替现象。为了满足人们日常沟通交流的需要,部分实词或词语组合出现了向虚词的转化。在此过程中,原有的词汇意义不断淡薄,逐渐演变成为表示某种特定语法关系的标志,这就是所谓的语法化现象。日语也不例外。日语中的机能辞可以被视为处于实词和传统意义上的助词、助动词(虚词)之间的中间形式,变化尤为迅速、显著。因此,研究其发展轨迹对于揭示语法化等语言现象的产生过程和主要特征具有重要意义。

本研究以语料库素材为基础,考察了 20 世纪部分日语助词性机能辞的使用情况。所谓机能辞是指那些由实词或原本独立使用的多个虚词组合演变而来的表达形式。它们的形态、功能较为固定,失去或部分失去了原有的词汇意义,在句中仅表接续、提题等语法功能,性质迥异于单纯的词语组合。尽管功能类似于传统意义上的助词、助动词,但在迄今为止的主要语言学研究成果中,却未将其纳入虚词的范畴。

这些表达形式使用频率很高,并被逐渐“重新包装”(repackaging)。源自实词的机能辞在演变过程中,组成单位的个体身份逐渐消失,整个组块在形式上出现缩减,显现出明显的语法化特征。这也从一个侧面印证了 Boyland(1996)的理论。由于机能辞的性质较为活跃,因此是探索语法化等语言演变规律不可多得的素材。然而,语法定位的模糊往往导致研究者一叶障目,局限于就事论事地探讨个别形式的用法,难以准确把握其整体特征。而判定标准缺乏可操作性也是目前研究中的一大难题。

本研究基于对大量语料库素材的考察。通过共时和历时两个视角考察这些机能辞的各方面性质,探索它们在现代日语语法体系中的定位、产生演变的过程、语法化与形态之间的关系以及在语法化过程中表现出来的各种特征。在此基础上,探讨机能辞的判定标准,并观察近义机能辞在使用频率方面的消长关系。

当然,本书决不可能涵盖助词性机能辞研究的全部内容。受学识所限,在具体的论述过程中,难免会挂一漏万或有失偏颇。在此仅作抛砖引玉,恳请广大研究者不吝指正。

本书属于上海外国语大学学科建设规划项目“面向日语语言研究的语料库开发及应用”(项目号: XKXRY07DBY)的研究成果之一,是在笔者博士论文的基础上补充修改而成的。该论文荣获 2008 年上海市研究生优秀成果(学位论文)奖。在撰写过程中,得到了导师上海外国语大学皮细庚教授的悉心指导。而本书的研究思路和方法则深受笔者硕士阶段导师戴宝玉教授的影响和启发。此外,上海外国语大学吴大纲教授、许慈惠教授、陈小芬教授、同济大学吴侃教授以及复旦大学庞志春副教授等前辈专家学者也为笔者提供了宝贵的建议和支持。在此,谨表诚挚谢意。

毛文伟

2008 年 11 月

# 目 次

|                                  |    |
|----------------------------------|----|
| 第 1 章 序論                         | 1  |
| 1. 本研究の目的                        | 1  |
| 2. 研究方法と素材の内訳                    | 3  |
| 3. 本研究の構成                        | 7  |
| 第 2 章 いわゆる機能辞の定義づけ               | 9  |
| 1. 永野(1953)までの段階                 | 9  |
| 2. 複合辞研究の展開                      | 14 |
| 2.1 永野(1953)による問題提起              | 15 |
| 2.2 いわゆる「後置詞」について                | 17 |
| 2.3 砂川(1987)の考察                  | 20 |
| 2.4 松木(1990)から見る研究の精密化           | 21 |
| 3. 複合辞に関する諸研究の盲点                 | 24 |
| 3.1 「複合」の問題                      | 24 |
| 3.2 「複合辞」という概念でカバーしきれないものの<br>存在 | 25 |
| 4. 機能辞という概念の設立                   | 29 |
| 5. 本章のまとめ                        | 31 |
| 第 3 章 日本語詞辞転成のメカニズムと機能辞の内訳       | 32 |
| 1. 詞辞転成の可能性について                  | 33 |
| 2. 自立語の文法化                       | 36 |
| 3. 機能辞の固定化                       | 38 |

|                                    |           |
|------------------------------------|-----------|
| 4. 言葉の衰退による化石化と形骸化 .....           | 40        |
| 5. 言葉の発達による自立化と形式化 .....           | 43        |
| 6. 言葉の消滅 .....                     | 45        |
| 7. 転成の経緯から見る機能辞の下位分類 .....         | 46        |
| <b>第 4 章 名詞を中心とした機能辞の文法化 .....</b> | <b>49</b> |
| 1. 先行研究 .....                      | 50        |
| 2. データの採集 .....                    | 53        |
| 3. 接続面の定着 .....                    | 55        |
| 4. 意味機能の定着 .....                   | 58        |
| 5. 各形態の発達ぶり .....                  | 63        |
| 6. 「とたん(に)」の成立から見た名詞の文法化 .....     | 66        |
| 7. 本章のまとめ .....                    | 70        |
| <b>第 5 章 動詞を中心とした機能辞の文法化 .....</b> | <b>71</b> |
| 1. 先行研究 .....                      | 72        |
| 2. データの採集 .....                    | 75        |
| 3. 先行動詞のテンスと機能とのかかわり .....         | 78        |
| 4. 「と思うと」の機能分析 .....               | 81        |
| 5. 各形態の競合と機能とのかかわり .....           | 87        |
| 6. 「と思うと」の成立から見る動詞の文法化 .....       | 91        |
| 7. 本章のまとめ .....                    | 97        |
| <b>第 6 章 類義機能辞の競合と機能辞化分析 .....</b> | <b>99</b> |
| 1. 機能の解明 .....                     | 99        |
| 2. 瞬間継起系機能辞間の競合 .....              | 102       |
| 3. 使用消長の原因追究 .....                 | 105       |
| 4. 瞬間継起機能辞の機能辞化分析 .....            | 116       |

---

|                                    |     |
|------------------------------------|-----|
| 5. 「からには」の機能辞化分析 .....             | 121 |
| 6. 本章のまとめ .....                    | 124 |
| <br><b>第 7 章 助詞性機能辞の判定基準</b> ..... | 126 |
| 1. 従来の研究 .....                     | 126 |
| 2. 機能辞認識のメカニズム .....               | 130 |
| 3. 文語要素の形骸化の現れ .....               | 134 |
| 4. 語形の特殊化 .....                    | 136 |
| 4.1 現代の口語文法からの逸脱 .....             | 136 |
| 4.2 構成要素の形式化 .....                 | 138 |
| 5. 他成分との相互作用－先行表現の特定化 .....        | 143 |
| 5.1 口語文法からの逸脱 .....                | 144 |
| 5.2 語彙面の制限と拡張 .....                | 145 |
| 5.3 テンス・アスペクト面の制限 .....            | 148 |
| 5.4 構造の制限 .....                    | 151 |
| 6. 他成分との相互作用－後続表現の誘導 .....         | 152 |
| 6.1 語彙面の制約 .....                   | 152 |
| 6.2 テンス・アスペクト面の制限 .....            | 153 |
| 6.3 モダリティとのかかわり .....              | 155 |
| 6.4 後続内容の誘導 .....                  | 156 |
| 7. 本章のまとめと判定基準の設定 .....            | 158 |
| <br><b>第 8 章 助詞性機能辞の内訳</b> .....   | 161 |
| 1. 機能辞度の検証 .....                   | 161 |
| 2. 助詞性機能辞の内訳 .....                 | 181 |
| 3. 本章のまとめ .....                    | 192 |

|                            |     |
|----------------------------|-----|
| <b>第 9 章 結語</b> .....      | 194 |
| 1. 機能辞という概念の提起と辞の全体像 ..... | 194 |
| 2. 機能辞の生起と特徴 .....         | 195 |
| 3. 機能辞判定基準の設定と検証 .....     | 203 |
| 4. 残された課題 .....            | 204 |
| <b>参考文献</b> .....          | 206 |
| <b>例文の出典</b> .....         | 210 |

# 第 1 章 序論

## 1. 本研究の目的

本研究は現代日本語の品詞体系における助詞性機能辞の位置づけ、生起の経緯、各形態および類義表現間の競合関係、判定基準及びその具体像の解明を目的とする。詳しい定義づけは次章で行うが、いわゆる助詞性機能辞とは例1～4で示される「について」、「を問わず」、「以上」と「ものを」に代表される膨大な辞的表現群の総称である。

(1) 急に無言になった私に、さち子は今日の欠勤について説明しはじめた。 1949『確証』小谷剛

(2) おびただしい種類のサムソン製品が、季節を問わず陳列されている。 1957『巨人と玩具』開高健

(3) こうなった以上、あまり手間取らせないで下さいな。 1949『デンドロカカリヤ』安部公房

(4) ただ百円、その金銭さえあれば、母も盗賊にはなるまいものを。 1903『酒中日記』国木田独步

これらの助詞性機能辞は、話し手や聞き手の意識において一つのまとまりとして捉えられているうえに、文中においてそれぞれ格助詞(例1)、副助詞(例2)、接続助詞(例3)あるいは終助詞(例4)に相当する機能を果たしている。しかし、実際の言語生活の中で頻繁に使用されているにもかかわらず、従来の日本語の品詞体系

においては、いずれも助詞として認められておらず<sup>①</sup>、その位置づけが極めて曖昧である<sup>②</sup>。また、本研究の第7章で指摘するように、今までの研究はその判定基準について盛んに議論を交わしたが、いずれも意味判断に基づくもので、実際にそれを尺度にして判断を試みると、難しいところがやはり多数残されている。それゆえ、いわゆる助詞性機能辞の判定も学者の個人的判断に頼るしかなく、首尾一貫した研究があまり見られなくて、その全体像の把握に多大な困難を抱えている。

本稿はまず従来の研究成果を概観し、その問題点を指摘する。そして、先行研究を踏まえ、機能辞という概念を打ち出すことによって、日本語の品詞体系の再整理を図る。次に、日本語の詞辞転生のメカニズムを解明し、機能辞の生起について検討する。それから、瞬間継起を表す一グループの機能辞を例にして、通時的視点からその生起と競合関係を観察し、その特徴をまとめる。最後に、以上の考察に基づき、助詞性機能辞の判定基準を設立し、それによって、各形式の機能辞度を図り、助詞性機能辞の全体像を解明したいと思う。

助詞性機能辞のほかに、また例5、例6で観察された「にちがいない」、「てならない」のような助動詞性機能辞も多数存在している。

---

① その中に、各研究者の認識に大きな食い違いが見られるものもある。たとえば、例4で示された「ものを」は明和・安永・天明時代の文法書『てには綱引綱』、『詞の玉緒』や山田(1908)においては助詞として認められている一方、大槻(1898)、橋本(1934)や時枝(1950)の研究では助詞の体系に収められなかった。また、森田・松木(1989)はそれを複合辞としていて、従来の助詞と区別した。詳細は次章を参照されたい。

② 永野(1953)はその一部を「複合辞」と名づけ、一つの辞としてみるべきだと提唱したが、それを「表現文法の問題」とし、従来のような単語や文節などが単位とされる文法論とは別次元の問題であると述べ、従来の文法論との対決を避けた。森田・松木(1989)も同じ立場をとった。そのため、品詞体系におけるこれらの表現の位置づけがやはり問題として残されている。

両者の間に少なからぬ共通点があるもの、より深く掘り下げてその性質を観察するために、筆者は考察の焦点をもっぱら前者に絞り、後者を本研究の対象から外すことにする。

(5) 誰だってそんな憶えがあるにちがいない。

1949『デンドロカカリヤ』安部公房

(6) なにか、すばらしい結果がもたらされそうに思えてならないのだ。

1965『ある研究』星新一

## 2. 研究方法と素材の内訳

本稿では、助詞性機能辞の使用実態をより客観的に把握し、研究の信憑性を高めるために、コーパス研究法を駆使した。

今までの日本語研究においては、いかにして考察対象となるものの使用実態をよりよく観察できるかという研究法について、多くの議論がなされてきた。大まかに分類すれば、研究者自身の内省による判断、アンケートによる適正調査、コーパスによる大量言語調査などの方法が取られてきた。これらの方法はいずれも一長一短のところがあ、り、万全な方法はいまだにまだ見つからないと言える。

しばしば指摘されているように、個人の内省に基づく判断は、よく地域、年齢などの要因に影響され、個人差が大きい。場合によっては、言語の使用実態との間に大きな食い違いさえ見られる。そこで、許容度に関するアンケート調査を行い、その結果を数値化する研究法が考案された。

しかし、アンケート調査を行う際、予算、時間などの制限により、研究者が接しうる被験者の人数は、不十分になりがちである。たとえば、豊田(1985)は、日本語の母国話者を対象に行われ

た調査の結果に基づいて、接続助詞「と」、「ば」、「たら」、「なら」の使い分けを考察した。が、アンケートを受けた人はただ31名しかなく、さらに年齢、出身地、男女別などで分類すれば、各グループの人数は極めて少なくなる。そのため、その研究結果が果して言語の一般使用実態に当てはまるかどうかは疑問のように思われる。そして、アンケートの内容構成や問題の出し方においても研究者の意図するところに重みが置かれたり、被験者が暗示をかけられたりして、調査結果に歪みが出てしまう恐れもないわけではない。

アンケート調査に基づく研究には、以上のような欠陥が存在するため、パソコンの普及とともに、電子化された言語素材の集合体であるコーパスを利用して、言語の使用実態を考察する研究法が盛んになってきた。コーパス研究法の基本は、大量の言語データより用例をくまなく検索し、統計、分析することにあるため、実証的研究の一種とも認められよう。ここ数年、コーパスによる実証的研究は、すでに多数の成果が見られていて、文法、語彙および文章論の分野では、確固とした地位を築きつつあるように思われる。

しかし、新しい研究方法であるだけに、その方法論はまだまだ完璧だとはいえないといわざるを得ない。コーパスさえあれば、立派な研究ができると考えがちであるが、実はそこに大きな落とし穴が潜んでいる。コーパスはただ言葉の集合であり、研究の素材に過ぎない。ちょうど料理の味がコックの腕前に頼るところが大きいと同じように、研究の視点や分析手法のいかんによって、その結論の有効性には雲泥の差がある。

本研究の信憑性を高めるために、筆者はコーパスの内容構成の検討と、分析手法の吟味という二つの側面から模索してきたが、ここで簡単に説明しておく。

コーパスは、単なるテキストデータの集積であるように思われがちであるが、その規模と内訳は、研究結果の信憑性と深く関わっている。そのため、例文収集の段階に当たって、まず量、質の両面から、研究目的に対する当該コーパスの有効性を確認すべきである。

コーパスによる実証的研究が、大量の言語データから用例をくまなく抽出する帰納的な手法である以上、研究結果の信憑性を評価するには、まず母体となるデータの規模が問題となる。例文抽出の元となるデータが少なすぎると、それに基づく考察の有効性が疑わしくなる。本研究の有効性を保つために、筆者は約7,600万字規模のコーパスを使用した。その構成は表1に示されている<sup>①</sup>。

| ジャンル | 会 話  | 小 説   | エッセー | 社説・記事 | 論説文  |
|------|------|-------|------|-------|------|
| 作品数  | 58点  | 594点  | 69点  | *     | 64点  |
| 文字数  | 345万 | 3537万 | 750万 | 1833万 | 679万 |
| 作家数  | 36人  | 136人  | 33人  | *     | 59人  |

表 1

また、ある表現の使用頻度は、その文体のジャンルと深くかかわっている。たとえば、「イ抜き」現象の例文(考えている→考えてる)を新聞記事で探すのはもちろん無謀であるが、「とすると」、「とすれば」などのような書き言葉の表現をシナリオのような会話文の素材で検索するのも、見当違いのやり方だといえる。本稿の研究素材となったコーパスにおいて、作品数といい、作家数とい

① 社説や記事については、連載記事などがあり、作品の点数は数えにくく、また作者不明の場合もよくあるので、その統計を省くことにした。

い、いずれも小説のほうが圧倒的に多い。また、ほかのジャンルの素材に比べて、小説は生活に近いし、表現も新聞記事と比べ、多様であるため、言葉の使用実態を考察するには一番ふさわしいものではないかと思われる。

そして、周知のように、ある表現の使用状況が時代とともにだんだん変貌していくことは珍しくない。特に機能辞は、時代の推移に伴って、その用法が激しく変化する現象がよく観察される。そのため、コーパスから用例を採集する際、その時代性をも注意しなければならない。考察対象の使用実態を年代別に観察するために、筆者は各用例の出典に当該作品の初出年代という情報を添加し、それによって並べ替えなどの操作を行った。

それから、ある表現の使用実態を観察する際、用例の絶対数だけでなく、その分布を見るのも重要な意味がある。絶対数は少なくないが、ほとんど一人か二人の作品に集中しているとなると、当作者の個人的習慣によるおそれがあるため、それを一般化視するのは妥当ではない。研究の信憑性を高めるためには、このような個人的影響を如何にして抑えるかは重要な課題となる。

要するに、通時的研究の結果をより確実なものにするためには、各年代における素材の量的分布もその作者の分布も比較的均衡であることが要求される。しかし、コーパスの構築が莫大な労力を必要とする作業であるため、今の段階では、万全の素材収集ができないのが実情である。本稿が利用するコーパスに収録された小説を十年ごとに統計した表2を参照されたい。これで分かるように、敗戦前の作品は量といい、作家数といい、やや少ないが、この問題を適切な分析手法の運用でカバーしたいと思う。

| 時代① | 1900 | 1910 | 1920 | 1930 | 1940 | 1950 | 1960 | 1970 | 1980 | 1990 |
|-----|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 作品数 | 44点  | 82点  | 83点  | 47点  | 31点  | 44点  | 122点 | 55点  | 42点  | 44点  |
| 文字数 | 178万 | 366万 | 177万 | 234万 | 128万 | 230万 | 666万 | 677万 | 497万 | 377万 |
| 作家数 | 10人  | 18人  | 17人  | 25人  | 24人  | 24人  | 36人  | 49人  | 39人  | 36人  |

表 2

そして、コーパスの量と質より、適切なデータ採集や分析手法の運用がさらに大事である。以降の考察において、採集した各考察対象の用例の数量と内訳、そして時代差などの特徴に留意しながら、研究を進めて行きたいと思う。

### 3. 本研究の構成

本研究は、全部で9章から構成されている。各章の内容は次のとおりである。

序章では本稿の研究目的と手法を紹介し、研究の土台となるコーパスの内容構成およびデータの分析法などについて説明する。

第2章では、従来の研究を概観した上で、その盲点を指摘し、機能辞という概念の設立と日本語の品詞体系の再整理を図る。

第3章では、日本語の詞辞転生のメカニズムを解明し、機能辞へ転生する三つのルートを考察し、その違いによって機能辞の分類を行う。

第4章では、機能辞「とたん(に)」を例にして、名詞の文法化の経

---

① 「1900」、「1910」はそれぞれ1900年～1909年、1910年～1919年という時間帯のことを指す。以下同。また、ここでの作家数は当該時代で作品を発表した作者の数である。そのため、安部公房のような創作暦が長い作家が重複して統計されることがあり、ここの合計は表1で示された小説部門の作家数をはるかに上回っている。

緯を観察する。そして、通時的視点から、各形態の競合関係を整理した上に、「途端」の文法化について分析を行い、その特徴を究明する。

第5章では、機能辞「と思うと」を例にして、動詞の文法化のメカニズムを考察する。そして、通時的視点から、各形態の競合関係を見た上、当該機能辞における「思う」の文法化の経緯を分析し、その特徴を究明する。

第6章では、まず類義関係にある「とたん(に)」、「と思うと」、「や否や」と「が早いか」の歴史上の競合関係を観察し、機能上の違いにより、優勝劣敗の原因を突き止める。それから、これらの機能辞と助詞の形式化によって生まれた「からには」を対象に、機能辞化の分析を行い、その共通点を検討し、判定基準設立の準備を行う。

第7章では、従来の研究を踏まえ、形態の特殊化、先行表現の特定化及び後続表現の誘導という三つの視点から、助詞性機能辞の特徴を究明し、その判定基準の設立を試みる。

第8章は、第7章で提示された判定基準に基づき、各表現の機能辞度を検証し、機能辞に該当するものを選び出すことによって、助詞性機能辞の全体像を究明する。

第9章では、本研究をまとめ、残された問題点を整理し、今後の課題を展望する。